

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：33705

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02500

研究課題名（和文）子どもの意思決定能力を育成する母子相互作用の解明

研究課題名（英文）A study of mother-child interaction that fosters children's decision-making abilities

研究代表者

川嶋 健太郎（Kawashima, Kentaro）

東海学院大学・人間関係学部・教授（移行）

研究者番号：80360204

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では意思決定場面（独自に作成した着せ替え課題）における保護者とその子ども（幼稚園児）の相互作用・学習のプロセスについてビデオを用いて行動観察し、保護者の意思決定支援行動を14種類に分類した。またインタビュー・行動観察を元に保護者・保育者の意思決定支援行動および支援観尺度を作成した。中学生・大学生を対象とした調査において幼少時の親からの意思決定支援および現在の意思決定能力との関連を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、自分のことを自分で決めることのできない子どもたちが増えている。子ども達の選択する力、意思決定する能力を育む保護者・保育者の行動=意思決定支援を家庭および保育園・幼稚園において十全に行う必要がある。本研究では、保護者とその子どもの相互作用の観察結果により、子どもの言動に対する親の支援行動の種類が示された。また、意思決定支援行動・支援観についての尺度作成によって、保護者・保育者の意思決定支援の現状を把握するツールである行動的/心理的尺度が複数作られた。これらは子どもの意思決定能力を育成するために有用である。

研究成果の概要（英文）：In this study, we conducted a behavioral observation using video to examine the interaction and learning processes between parents and their children (kindergarteners) during decision-making situations (a uniquely created dress-up task). We classified the decision-making support behaviors of parents into 16 categories. Additionally, based on interviews and behavioral observations, we created scales for parents' and caregivers' decision-making support behaviors and their views on support. Surveys conducted with middle school and university students showed the relationship between decision-making support received from parents during early childhood and their current decision-making abilities.

研究分野：心理学

キーワード：意思決定支援 母子相互作用

## 1. 研究開始当初の背景

近年、自分のことを自分で決めることのできない子どもたちが増えている。幼稚園では数ある活動の中で何をしたいのか決められず立ち止まったままの子どもたちをよく見かける。現状では子ども達の選択力や意思決定力を育むための保護者や保育者の意思決定支援が、家庭や保育園・幼稚園で十分に行われていない。

これまで選択・意思決定の発達に関する支援については子育てのスタイルや選択機会の提供の効果が検討されてきた。動機付け研究では、自律性支援をする子育てが子供の認知および動機づけに対して効果的だと考えられている。自律性支援 (autonomy support) とは相手が自発的で自律的であるように能動的にサポートをすることをいう (Ryan, Deci, Grolnick, & La Guardia, 2006)。具体的には子供が課題に取り組む際に、課題の目標を説明することや、子供の気持ちを把握すること、選択肢を提供して子供に主導権を与えること、子供をコントロールしないことなどである。一方、統制的な子育ては命令をしたり、親の都合を押し付けて子どもをコントロールすることである。

しかし自律性支援を子どもの意思決定支援とイコールにすることには問題がある。まず自律性支援は主に子どもの動機付けを問題としており、意思決定能力の向上を目指すものではないことである。例えばしつけなど面白くはないが必要な知識を学ばせるときなど保護者は統制的となるが、これは子どもの意思決定能力の向上に不可欠と思われる。次に保護者が意思決定支援を試みるとき、子どもの行動によっては保護者はどうしても統制的な行動を取ってしまうことがある。例えば同じ保護者でも兄弟の性格によっては兄には自立支援的に振る舞えるが、弟には叱ったり選ばせないなど統制的な行動を行うことはある。おそらくこの弟に対しては統制的な行動を行うことに何らかの利点があるものと思われる。

以上の検討の結果、子どもの意思決定は保護者・保育者と子どもとの相互作用・学習プロセスと見なすべきである、という問題意識を持つに至った。保護者は子どもに複数または1つの選択肢を提示する (例えば幼児に「今日着る服はこれでいいね!」と喋って着せてしまう)。子どもは保護者の提示した限られた選択肢の中から選択する。子どもは難しい選択の場合には意思決定に時間がかかり、またダメな選択肢は拒否する。保護者は子どもの好みや選択傾向を学習し、次の選択機会では子どもに拒否されにくい選択肢を提示するなど選択肢の種類・提示方法 (強制・2つの選択肢のみ・多数の選択肢など) を変更する。一方、子どもは日常的な選択の機会を通じて、その状況に適切な選択肢は何であるのかを保護者が提示する選択肢から学習し、自らの意思決定能力を向上させていく。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は意思決定場面における保護者・保育者と子どもの相互作用・学習のプロセスを解明し、保護者・子供向けの意思決定支援尺度を作成することを通して子どもの意思決定能力を高める知見を得ることであった。

①保護者・保育者と子どもの相互作用的意思決定のプロセスと、意思決定支援を促進する要因・阻害する要因の解明

従来の研究では子どもの意思決定特有の保護者・保育者との相互作用を無視してきていた。本研究では様々な阻害要因(時間・社会的プレッシャーなど)や促進要因のもとで子どもに意思決定課題を与えて、保護者がどのような支援行動を行っていくかビデオを用いて実験的行動観察を行った。保護者の意思決定支援行動のきっかけ(どのような子どもの行動があるか)と結果(支援を行った結果、子どもはどうか)の関連性を分析した。以上により阻害または促進要因のもとでの子どもの意思決定時の支援プロセスが解明することを目標とした。

②意思決定支援尺度を用いた幼児の意思決定支援の現状把握

意思決定支援を促進・阻害する要因および保護者・保育者の意思決定支援行動を測定する尺度を作成した。またこの意思決定支援尺度を用いて各年代の子どもを持つ保護者・保育者に実施し、幼児の意思決定支援の現状の把握を目指した。

## 3. 研究の方法

① 保護者・保育者と子どもの相互作用的意思決定プロセスの行動観察

幼児および保護者対象の着せ替え課題

2台のカメラに向かって机の左側に母親、右側に子どもが座った。小型カメラは参加者2名の上半身が撮影されるように、ビデオカメラは上側から課題実施時の手元が撮影されるように設置された。母親に課題のバインダーが渡され、2台のカメラの撮影が開始された。課題の進行は母親に任されており、母親は最初の場面である幼稚園の場面ラミネートの上に下着状態の着せ替

え人形（少年）を置いた。課題が開始すると、母親が課題の実施方法について説明を行った。母親と子どもは着せ替え用の服が準備された課題バインダーをめくり、上着やズボン、幼稚園制服、靴下、靴、帽子、雨具などから子どもが思う場面に適切な服装を選んだ。着せ替えが完了したことを確認して、母親は試行を中断して次の場面での試行に移る準備をした。この際に使用した服装は元のバインダーの台紙ラミネートに戻した。準備が済むと次の場面での試行が同様に開始された。場面は最初から幼稚園前・体育室・公園・雨降り・私の好きな服、の順に呈示され、およそ2分程度で試行が終了した。全ての場面での試行が終了すると課題終了となった。

Figure 1 着せ替え課題の様子



## ② 意思決定支援行動・支援観についての尺度作成と現状把握

母親の意思決定支援行動尺度および意思決定支援観尺度の作成

3歳から6歳（幼稚園・保育園に在籍する年代）の幼児を持つ母親300名を対象にWeb調査を行った。川嶋・北原・蓮見(2017)での幼稚園児の保護者に対して行った意思決定支援についてのM-GTAでの分析から生成された29の概念の中から、意思決定行動尺度の項目について具体的な意思決定支援行動に関する19の概念を元に95項目、意思決定支援観については同様に9の概念を元に50項目の質問項目を作成した。評定に際しては、調査参加者に自分の子供一名を思い浮かべ、子供が何かを選んだり決めたりするときどのような思いを持っているか、各項目について、「1：まったくあてはまらない」から「5：よくあてはまる」までで評定させた。

大学生の親からの意思決定支援の認知の検討

大学生199名（平均年齢19.38歳、男性54名、女性145名）を対象にしてマークシート方式(Shared Questionnaire System (SQS)2)の質問紙を用いて調査を行った。川嶋・北原・蓮見(2017)での幼稚園児の保護者に対して行った意思決定支援についてのM-GTAでの分析から生成された29の概念のうち、具体的な意思決定支援行動に関する概念20について、概念ごとに質問項目を作成した。質問項目の作成にあたっては、インタビューの中での保護者の発言をもとに具体的なセリフを含めた。発達心理学を専門とする大学教員によって項目を検討した結果、最終的に19概念(表1)について概念ごとに5項目ずつ、合計95項目を作成した。評定に際しては、調査参加者に幼少時(幼稚園・保育園から小学校低学年の頃)を思い出すように指示し、何かを選んだり決めたりする際に保護者はどうであったのか、各項目について、「1：当てはまらない」から「5：当てはまる」までで評定させた。

中学生とその母親の意思決定支援

中学生1～3年生とその母親300名を対象にWeb調査を実施した。中学生対象の調査項目は幼少期の保護者からの意思決定支援認知(川嶋・蓮見, 2020)5件法60項目、自己決定意識尺度(新井・佐藤, 2000)であった。母親対象の調査項目は意思決定支援行動(川嶋・蓮見, 2019)6件法59項目、子どもの意思決定能力評価5件法12項目であった。

保育士・幼稚園教諭の意思決定支援行動尺度の作成

保育士・幼稚園教諭400名がWeb調査に参加した。川嶋(2017)での幼稚園教諭に対して行った

意思決定支援についての M-GTA での分析から生成された 24 の概念概念ごとに 2 つの合計 48 項目質問項目を作成した。評定に際しては、調査参加者に担当している子供が何かを選んだり決めたりするとき、どのようにしているか、各項目について、「1: 全くしない」から「6: いつもの」までで評定させた。

#### 4. 研究成果

##### ① 保護者・保育者と子どもの相互作用的意思決定プロセスの行動観察

幼児および保護者対象の着せ替え課題

アノテーションソフトウェアである ELAN (EUDICO Linguistic Annotator) を用いて、二つの動画および一つの音声と同時に視聴しながら注釈作業を行った。注釈については、親の発言・子どもの発言・親の発言の機能に関する注釈層を作成した。親の発言・子どもの発言はそれぞれの話者の発言を逐語的に注釈した。課題試行の実施について、実施中・準備中・その他に分類して注釈した。親の発言の機能については、14 種類 (問題点の指摘・選択肢についての説明・選択肢の提示・提案・疑問・選択完了の確認・同意・注意を促す・笑い・冗談・繰り返し・その他・不明) の分類を作成した。各親の発言はどのような機能を持っているか生起する時間を検討した。

##### ② 意思決定支援行動・支援観についての尺度作成と現状把握

本研究では母親の意思決定支援行動および意思決定支援観、子ども (中学生・大学生) が認知する幼少時の親の意思決定支援、保育者の意思決定支援行動についての行動的/心理的尺度を作成し、これらの尺度は一定の信頼性・妥当性を示した。これらの尺度により母親や保育者の普段の意思決定支援の現状を把握し、子どもの意思決定能力・自己決定感等への程度影響を確かめようとするツールを得ることができた。

母親の意思決定支援行動尺度および意思決定支援観尺度の作成

母親による幼児への意思決定支援行動についての 95 項目について最尤法 Promax 回転での因子分析を行った結果、「親主導・急がせる支援」因子 ( $\alpha=0.91$ )・「選択肢絞り込み・助言支援」因子 ( $\alpha=0.89$ )・「話し合い・説明による支援」因子 ( $\alpha=0.85$ )・「子どもの意思尊重・待機支援」因子 ( $\alpha=0.84$ )・「理由を聞く支援」因子 ( $\alpha=0.73$ ) の 5 つの因子を抽出した。

また母親の持つ子供への意思決定支援観についての 50 項目について同様に最尤法 Promax 回転での因子分析を行った結果、「親としての願い」因子 ( $\alpha=0.84$ )・「選択の制限」因子 ( $\alpha=0.81$ )・「親への従順」因子 ( $\alpha=0.78$ )・「子供との妥協」因子 ( $\alpha=0.73$ )・「子供に選ばせる理由」因子 ( $\alpha=0.77$ ) の 5 つの因子を抽出した (川嶋・蓮見, 2019)。

中学生とその母親の意思決定支援

中学生及び母親による各下位尺度得点間の相関を検討した。幼少期に受けた保護者からの意思決定支援行動についての中学生の認知と中学生の現時点での自己決定意識尺度の各下位尺度間の相関係数を検討した。保護者からの支援行動のうち「助言」「認める」支援は自己決定志向性・マイナス感情の少なさ・自己決定効力感と有意な正の相関を示した。一方、「急がせる」「誘導する」支援は他者決定選好の少なさ・不安の少なさ・自己決定効力感に有意な負の相関を示した。また「理由を聞く」支援は自己決定意識に弱い負の相関を示した。このことから「理由を聞く」ことが子どもにとってはネガティブな行為、例えば叱られることの一形態である可能性がある。また母親の意思決定支援行動 (子どもの幼少期) と自己決定意識尺度の各下位尺度間の相関係数を検討した。「親主導・急がせる支援」が自己決定意識の各下位尺度に有意な負の相関を示した。また「選択肢絞り込み・助言支援」などは自己決定志向性には有意な正の相関を示すものの自己決定効力感など他の下位尺度には強い関連性を示さなかった。母親の考える支援行動と中学生の子供が認知した支援には下位尺度の内容や自己決定意識との関連の様相に違いが見られたと言えよう

大学生の親からの意思決定支援の認知

大学生の認知する幼少期の親からの意思決定支援項目 95 項目について最尤法 Promax 回転での因子分析を行った結果、「助言をする」因子 ( $\alpha=0.90$ )、「急がせる」因子 ( $\alpha=0.92$ )、「理由を聞く」因子 ( $\alpha=0.85$ )、「誘導する」因子 ( $\alpha=0.86$ )、「認める」因子 ( $\alpha=0.84$ ) の 5 因子が抽出された (川嶋・蓮見, 2018)。

上記の結果から調査参加者を非階層的クラスター分析 (k-Means 法) により分類した。ハーティガンルールをもとにクラスター数を検討したところ 3 クラスターが適していると示唆された。親からの意思決定支援に関するクラスターに分けて、意思決定支援尺度得点および自己決定感尺度得点の平均値の違いを検討した。自己決定感についても同様に分散分析をしたところ、クラスターの主効果は有意であった ( $F(2, 149)=6.27, p<.001, \eta^2=.08$ )。

#### 保育士・幼稚園教諭の意思決定支援行動尺度の作成

保育士・幼稚園教諭の意思決定支援行動についての48項目について最尤法・Promax回転による因子分析を実施したところ、「子供主体の支援」因子( $\alpha=0.94$ )「保育者視点の支援」因子( $\alpha=0.90$ )の2因子が抽出された。

意思決定支援行動の「子供主体の支援」は養育行動尺度の各下位尺度、保育者スキル尺度の「援助賞賛スキル」「情報発信・獲得スキル」と0.57~0.6程度の比較的高い正の相関、「罰スキル」との負の相関が見られた。一方、意思決定支援行動の「保育者視点の支援」は保育者スキル尺度の「罰スキル」「非一貫性・子ども主導スキル」と0.443、0.519の比較的高い相関が見られた。保育者効力感・保育者ストレスとは「子供主体の支援」有意な相関が見られた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 蓮見元子・尾見敦子・川嶋健太郎	4. 巻 32
2. 論文標題 小学生の放課後の活動の学年による変化と保護者のかかわり - 音楽活動, 習い事を中心に -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 川村学園女子大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 77 - 95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 川嶋健太郎・蓮見元子	4. 巻 5
2. 論文標題 母親の持つ幼児への意思決定支援観について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東海学院大学研究年報	6. 最初と最後の頁 25-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24478/00003690	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 蓮見元子・北原靖子・川嶋健太郎	4. 巻 30
2. 論文標題 高齢者の生活とまなびー健康, 子どもとの関係を 中心にー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 川村学園女子大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 41-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない, 又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 川嶋健太郎・蓮見元子	4. 巻 45
2. 論文標題 大学生の幼少期の親からの意思決定支援の認知と自己決定感	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東海学院大学研究年報	6. 最初と最後の頁 45-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24478/00003658	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 川嶋 健太郎
2. 発表標題 幼年期の子供への意思決定支援の認知と中学生時点での自律性
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 川嶋健太郎
2. 発表標題 子どもの選択場面における母親の支援行動
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 川嶋健太郎 蓮見元子
2. 発表標題 保育者による幼児への意思決定支援行動
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川嶋健太郎・蓮見元子
2. 発表標題 母親による幼児の意思決定支援行動と意思決定支援観
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 蓮見元子・川嶋健太郎
2. 発表標題 小学生の意思決定行動を育成する保護者の養育行動
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 蓮見元子・川嶋健太郎
2. 発表標題 子どもの意思決定と母親の支援行動との関連性について
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川嶋健太郎・北原靖子・蓮見元子
2. 発表標題 放課後の居場所での支援が低学年児童および保護者による放課後評価に与える影響
3. 学会等名 日本教育心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川嶋健太郎・蓮見元子
2. 発表標題 大学生の幼少時に保護者から受けた意思決定支援
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 蓮見 元子・川嶋 健太郎
2. 発表標題 幼児に対する母親の意思決定支援行動
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 蓮見 元子・川嶋 健太郎
2. 発表標題 保育園児の共同意思決定と大人の介入支援
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	蓮見 元子  (Hasumi Motoko)  (60156304)	川村学園女子大学・文学部・非常勤講師    (32514)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------